M 情報　2025/10 月　　阿部

「なぜ 65 歳の臨床獣医師が博士論文を書くのか」

はずかしながら阿部紀次、現在宇都宮大学農学部を窓口にして、東京農工大学連合大学院へ博士号取得のため論文提出中です。現在は「予備審査受理」の段階で、最終的には**今年度末に合否が見えます**。ここでは、私がなぜそれを目指すに至ったか、その心境をお話しし、農家の皆様と若手獣医師へのメッセージにしたいと思います。

私たち臨床の獣医師は、毎日、牛たちの病気やケガなど健康の変化に向き合っています。現場では、「なぜこうなるんだろう」また、「この方法は良いはずだが、本当に効果的だろうか」など、実は自問自答の日々です。博士論文を書くというのは、そうした日々の疑問を科学の力で確かめていくことに繋がります。

「経験」を「証拠」に変えるために

経験を積むことは大切ですが、経験だけでは説明不足になることもあります。研究という形でデータを集め分析し、結果をまとめることで、「だからこうなる」とか「こうすれば確かに良くなる」とかの根拠（エビデンス）を作ることができます。つまり、博士論文を書くことは、現場での経験を科学的な証拠に変えるための集大成的作業です。その意味で、現役獣医師の残された時間が少なくなった、今この時に博士論文を書くことには、それなりに大きな意味があると感じています。若いうちに研究に取り組むことは確かに有利ですし、その意義も大きく、そうすべきだったと思います。しかし、若い時分には大きな意義は見えませんでした（むしろ臨床家には不要とも・・）。まあそれはやらなかった言い訳に過ぎません。ですから、今、長年現場に立ち続け、数えきれない牛たちと農家さんに向き合ってきたからこそ見えてくる課題・知恵・感覚を、「科学の形＝博士論文」にまとめることは、大げさですが、現場を支えてきた知恵を未来に残す行為のつもりです。こんな私の浅知恵ですが・・・

「恩返し」の一心で

日々の診療や観察から得られる気づきは本当に貴重です。実験室に閉じこもっている研究者には体験できない“生きた研究テーマ”です。だからこそ、それを記録に残し、論文という形にまとめないと、他の獣医師や農家さん、そして研究者へも伝わりません。博士論文は、その知恵を誰でも学べる形にして残すための方法です。つまり、「現場の経験を社会の財産に変える」ことです。幸運にも私は NOSAI、２つの大学（その間 10 ヶ月のシドニー大学）、そして壱岐島（和牛）へも・・・身を移しつつ様々な経験を積ませていただきました。うまく行ったこともありましたが、心ならずも失敗に終わったことも多く、今こそその恩返しを少しでも行いたい一心です。

論文制作過程における「研究」を通じ、臨床家は基礎研究の専門家とも意見を交わすようになります。たとえば、農場で見られる“原因のわからない不調の解明”や“新しい管理法の効果の検証”は、ひょっとしたら我々が目にしている何気ない１症例から解決に向かう可能性もあるのです。そのような可能性は、やはり意を同じくする科学者と

一緒に解き明かすことで高まるものです。ですから、『研究をする臨床家は、現場と研究の橋渡し役』という位置づけとなりましょう。

また、研究を進めていく中で、文献を調べ、データをまとめ、論理的に考える力が養われます。特に周りを見回すと、黒崎先生は言うに及ばず、茅野先生は公衆衛生学（疫学）で博士号をすでに取得済で、技術職員皆に統計学について講習還元されています。このように、博士号取得の経験と自信は、次の世代を育てるときにも大きな財産になります。はっきり言って、無くても良いかもしれませんが、博士号とは、「自分で考え、科学的に答えを見つける力を身につけた証」であり、「自信を持って行う」ための、きっと代えがたい“根拠ある自信”を与えてくれるのだろうと期待しています。『阿部さんも偉いよね～その歳になっても頑張ってて・・・』や、『最後には何かしら賞状が欲しくなるんだね～』と冷やかされることもあります。まあ、私ごときがそれを取得できれば、若い頃の自分をご存じの方には噴飯ものかもしれません。ただ、「あの人ができるのなら自分も」と思ってくれれば最高の効果です。あと、天国の両親は予想外だと喜んでくれているでしょう。

私にとっての博士論文とは

いずれにしても臨床家が博士論文を書くというのは、「単に学位を取るため」ではなく、現場での経験や疑問を、少なからず未来の酪農や獣医学に役立てるためです。つまり、私にとっての博士論文とは**「今までいただいた牛の命と農家皆様のご理解を礎として、自分の研究実績を現場の知恵として科学の言葉に翻訳し、また現場に戻すための大切な作業」**だと考えています。この取り組みを通して、これからも“あくまで臨床獣医師として”、牛の健康と酪農の発展に貢献していこうと強く思っています。

会社にはご理解いただいて、貴重な時間を割かせていただいていることをとてもありがたく思っています。本音を申せば、若い皆が普通に博士号持っている位の当たり前さがこの分野にあれば、一皮むけた獣医臨床界になると思うこの頃です。

題名： **乳牛の第四胃および代謝疾患に関する総合臨床的研究**

Integrated Clinical Research on Abomasal and Metabolic Disorders in Dairy Cattle

学位論文の基礎となる学術論文

阿部紀次，園田一輝，加藤敏英，佐藤綾乃，岩澤裕介，蒔田浩平.
ウシの開腹手術における「ボンドによる滅菌ドレープ貼り付け法（D-by-B 法）」の考案と術前消毒の維持効果.
産業動物臨床医学雑誌, 2025:16(5) 印刷中.

Abe N, Acorda JA, Yamada H, Ono K, Suzuki N.
Relationship between abomasal ulcer and various disorders in dairy cattle.
Philippine Journal of Veterinary Medicine, 1995:32(1):33-37.

Abe N, Lean I, Rabiee A, Porter J， and Graham C.
Effects of sodium monensin on the reproductive performance of dairy cattle.
II. Effects on metabolites in plasma and resumption of cyclicity and oestrus in lactating cows.
Australian Veterinary Journal, 1994:71(10):277–283.